

アジア現代史シリーズ④

アジア経済研究所



リー・クアンユウ の時代

竹下秀邦 著

竹下秀邦 著

シンガポール——リー・クアンユウの時代

アジア経済研究所

シンガポール——リー・クアンユウの時代

筆者紹介

竹下

秀邦

一九三五年、

東京都生まれ。上智大学卒業後、アジア
経済研究所（一九六〇年～九四年）勤務。
現在は常葉学園浜松大学国際経済学部教
授。

アジア現代史シリーズ 4

シンガポール——リー・クアンユウの時代

著者 竹下 秀邦

発行所 アジア経済研究所

東京都新宿区市谷本村町42 電話（3353）4231（代）

1995年3月31日発行◎ 無断転載を禁ず 印刷/製本 三陽社

ISBN 4-258-21004-8 C 3033

アジア現代史シリーズ④

ISBN4-258-21004-8 C3033

シンガポール——リー・クアンユウの時代||目次

はじめに

第1部 軍政期（一九四五年九月～四六年三月）

——マラヤからの分離

第1章 軍政はじまる 4

第2章 軍政の任務 9

1 日本関係 10

2 難民・被災民の処理 12

第3章 軍政から民政へ 13

1 労働運動とマラヤ共産党

2 民政移管とマラヤ連合案 14

第2部 植民地時代：

第1章 直轄植民地の立法・行政

1 イギリスの新統治方式 24

2 シンガポールに立法議会（一九四八年三月） 24

第2章

左翼活動の台頭と非常事態

36

- 1 労働争議、非常事態への前哨戦
- 2 非常事態宣言（一九四八年六月）

36

地下共産党

40

マラヤの武装闘争

42

- 5 マラヤ民主同盟から反英同盟へ

44

第3章

公然世界の政治活動

47

- 1 マリア・ヘルトフ暴動事件（一九五〇年十二月）
- 2 第二期立法議会（一九五一年）

50

新憲法で政党政治に展望

51

第4章

李光耀と人民行動党

53

- 1 李光耀の生い立ち

53

海峡華人とマラヤ人意識

55

- 2 同僚グループ成立の芽生え
- 3 人民行動党結成の前史

57

人民行動党結成の前史

61

- 4 流血の一九五四年——人民行動党誕生への動き
- 5 人民行動党、結成される（一九五四年）

80

70

48

第5章

マーシャル政権と学生・労働運動（一九五五—五六六年）

85

選挙戦・各党の消長（一九五五年）	85
マーシャル主席大臣	88
ホクリー暴動と労働運動（一九五五年）	92
共産主義者等の定義、その動向	92
共産党による革命事業の評価	95
マーシャル、独立交渉へ	97
マーシャル、独立挫折で辞任（一九五六六年）	97
左翼運動の盛衰	103
1 人民行動党に左翼復活	103
2 林有福政府の一斉検挙と「十月革命」	104
3 第二回ムルデカ交渉（一九五七年）	108
4 左翼、盛り返す	110
5 貿にはまつた左翼運動	113
第7章 人民行動党稳健派による党支配	115
1 人民行動党稳健派の復活と市議会選挙（一九五七年末）	117
2 李光耀 共産党全権代表と密会	119
3 ムルデカ交渉の仕上げ（一九五八年五月）	120
4 林有福の総選挙態勢かため（一九五九年）	120

第3部	自治国時代	5 人民行動党の選挙準備（一九五八～五九年）
第1章	シンガポールの成立と人民行動党政権	6 選挙戦（一九五九年四～五月） 126
第2章	王永元事件と二つの補欠選挙	
第3章	1 市議会の廃止と王永元の離党	
第4章	2 補欠選挙（一九六一年四～六月）	
第5章	「マレーシア連邦」問題発生	139 137
第6章	左派の反応、バリサン結成へ	143
第7章	1 左派、マレーシア計画阻止に動く	141
	2 分裂の痛手と杜進才の発破	130
	3 バリサン・ソシエリスの成立	121
1	人民行動党の反撃	169
2	「マレーシア白書」から国民投票へ	165
マレーシアをめぐる内外状勢	162	
マレー・ソシエリスの結成への手続き	162	
対英交渉	157	
マレー・ソシエリスの成立	152	
人民行動党の反撃	152	
マレー・ソシエリスの結成への手続き	155	
対英交渉	152	
マレー・ソシエリスの成立	149	
人民行動党の反撃	149	
マレー・ソシエリスの結成への手続き	141	
対英交渉	141	
マレー・ソシエリスの成立	139	
人民行動党の反撃	139	
マレー・ソシエリスの結成への手続き	137	
対英交渉	137	
マレー・ソシエリスの成立	130	
人民行動党の反撃	130	
マレー・ソシエリスの結成への手続き	129	
対英交渉	129	
マレー・ソシエリスの成立	121	
人民行動党の反撃	121	

第8章	2	バリサン・ソシアリスに壊滅的な打撃	
3	3	ブルネイ反乱（一九六二年十二月）	
4	4	マレーシア結成に危機	
「冷冻庫作戦」発動（一九六三年二月）	177		
第9章	マレーシア結成への障害	184	
1	1	インドネシア、フィリピンが反対	
2	2	マラヤとの関係——経済交渉が難航	
第10章	マレーシア結成直前のトラブル	202	
1	1	自治国時代以前の経済発展	
2	2	人民行動党政権の経済開発	
第11章	自治国時代の経済	196	
第4部	マレーシア時代	207 202	
第1章	マレーシア、加盟から分離へ	212	
1	1	一九六三年州議会選挙	215
2	2	マラヤ総選挙（一九六四年四月）	222
3	3	変革の風——種族主義か非種族主義か	227
4	4	シンガポール暴動（一九六四年七、九月）	230
5	5	政治休戦（一九六四年九月）	235

第1章 シンガポール共和国の独立（一九六〇年代後半）	286	政治休戦の崩壊	6	237
1 マレーシアからの離脱・独立	285	「マレー・シア人のためのマレー・シア」——マレー・シア連帶会議	7	
トゥンク、シンガポール分離の決断	277	トゥンク、シンガポール分離の決断	8	245
分離への最後の一押し——ホンリム補欠選挙	274	分離への最後の一押し——ホンリム補欠選挙	9	247
「無血」の分離	273	「無血」の分離	10	249
第2章 インドネシア経済断交とマレー・シアでの経済機会	257	インドネシア経済断交とマレー・シアでの経済機会	6	
1 対決政策と中継貿易の断絶	268	対決による被害状況	1	258
2 対決のその後	266	対決のその後	2	261
3 対策、経済防衛局の設置	264	対策、経済防衛局の設置	3	264
4 マレー・シアでの経済機会	263	マレー・シアでの経済機会	5	268
島内左翼との戦い	273	島内左翼との戦い	2	273
南洋大学事件（一九六三年九月）	274	南洋大学事件（一九六三年九月）	1	274
2 バリサン系労組、その他諸団体への「破壊作戦」（一九六三年十月）	281	2 バリサン系労組、その他諸団体への「破壊作戦」（一九六三年十月）	2	281
3 バリサンの分裂（一九六四年四月～六五年三月）	277	3 バリサンの分裂（一九六四年四月～六五年三月）	3	277
第3章 第5部 共和国時代	285	第3章 第5部 共和国時代	1	285
第1章 シンガポール共和国の独立（一九六〇年代後半）	286	第1章 シンガポール共和国の独立（一九六〇年代後半）	1	286

共和国の種族問題

291

対外関係の基本

293

マレーシアとの緊張緩和・関係調整 インドネシアとの国交樹立と通商再開

301

シンガポール・ドルの誕生 新通貨、英ポンドからも独立

303

経済も分離・独立へ

303

シンドヘードの誕生 輸入代替から輸出指向型工業化へ

307

新通貨、英ポンドからも独立 輸入代替から輸出指向型工業化へ

307

輸入代替から輸出指向型工業化へ 地場華人経済と社会主義政権

313

長期政権の確立 パリサン、国会ボイコットで自滅

310

人民行動党、国会完全制覇（一九六八年四月）

310

イギリス軍のスクエーズ以東撤退 「一九七一年全面撤退」と雇用確保の戦い

310

国防整備計画 「一九七一年全面撤退」と雇用確保の戦い

310

英連邦軍の残留 一九七〇年代の人民行動党政府

338

329

第4章

1 党外人材の発掘と養成

347

345

2 一九七〇年代の人民行動党政府

342

3 英連邦軍の残留

341

4 国防整備計画

340

5 「一九七一年全面撤退」と雇用確保の戦い

336

6 イギリス軍のスクエーズ以東撤退

336

7 地場華人経済と社会主義政権

336

8 長期政権の確立 パリサン、国会ボイコットで自滅

320

9 人民行動党、国会完全制覇（一九六八年四月）

320

10 英連邦軍の残留 一九七〇年代の人民行動党政府

329

第5章	選挙による人材更新	2
野党・反政府勢力の動き（一九七〇年代）	351	
1 一九七〇年補欠選挙	356	
2 バリサンの転向	358	
3 一九七一年総選挙とその後始末	360	
4 学生運動の復活・短命挫折	362	
5 非合法反政府活動	365	
6 一九七六年総選挙	367	
7 共産主義統一戦線とマレーシア（一九七七年）	369	
8 メディア規制（一九七〇年代）	374	
9 一九八〇年総選挙へ	377	
第6章 教育制度改革	386	
第7章 一九七〇年代の経済発展	393	
第8章 外資と公企業	401	
第9章 政権交替の一九八〇年代	412	
第1章 第二世代指導層の形成（一九八〇年代）	415	
1 第二世代指導層の登場と人材発掘の制度化	411	
2 国会完全支配破れる（一九八一年十月）	412	

			3	一九八四年総選挙
			4	「敗北」の原因
			2	子息李顯龍の初舞台（一九八五・八六年）
			1	首相子息に脚光
			2	ミスター野党の国会追放（一九八六年）
			1	政権委譲で完全防備体制の構築
			2	新たなメディア規制（一九八六年五月～八月）
			3	法務業法の改正（一九八六年五月～九月）
			4	選挙制度の手直し（一九八七・八八年）
			5	大統領制度の変更——政権委譲への制度的仕上げ
第5章	1	政権委譲への戦い	432	422
	1	宗教と政治	425	419
	2	一九八八年総選挙	440	
	3	吳作棟チームで我慢	433	
	4	首相李光耀の最後の事業（一九八九年）	427	
第4章	1	政権委譲への戦い	436	
	1	宗教と政治	446	
	2	一九八八年総選挙	446	
	3	吳作棟チームで我慢	460	
	4	首相李光耀の最後の事業（一九八九年）	464	
第3章	1	政権委譲で完全防備体制の構築	425	
	1	ミスター野党の国会追放（一九八六年）	432	
	2	新たなメディア規制（一九八六年五月～八月）	425	
	3	法務業法の改正（一九八六年五月～九月）	427	
	4	選挙制度の手直し（一九八七・八八年）	433	
	5	大統領制度の変更——政権委譲への制度的仕上げ	440	
第2章	1	第三世代のデビュー	422	
	1	首相子息に脚光	425	
	2	子息李顯龍の初舞台（一九八五・八六年）	425	
	3	「敗北」の原因	422	
	4	「敗北」の原因	422	

第7部	一九九〇年代の展望	2
民営化		476
中継貿易の再興		473
第1章	李光耀の首相退任	3
一九九一年総選挙と吳作棟の試練	484	
第2章	将来の基本的問題	1
人口問題	493	
種族問題	495 493	
多種族主義の今後	498	
垣根の維持	501	
第3章	国家理念の形成	2
多種族主義の今後	493	
垣根の維持	503	
第4章	大量虐殺事件とその規模	4
華人社会による事後調査	513 510	
第5章	人骨発見、血債問題の発生	517
第6章	対日要求、血債問題	519
第7章	マレーシア加盟と対決政策の影響	522
第8部	血債問題と対日外交	524
第1章	大量虐殺事件とその規模	519
第2章	華人社会による事後調査	517
第3章	人骨発見、血債問題の発生	517
第4章	対日要求、血債問題	519
第5章	マレーシア加盟と対決政策の影響	522
第6章	民間要求と政府間交渉の落差	524
第7章	中継貿易の再興	473
第8部	民営化	476
第9部	一九九〇年代の展望	2
中継貿易の再興		473
民営化		476
中継貿易の再興		473
第10章	李光耀の首相退任	3
一九九一年総選挙と吳作棟の試練	484	
第11章	将来の基本的問題	1
人口問題	493	
種族問題	495 493	
多種族主義の今後	498	
垣根の維持	501	
第12章	国家理念の形成	2
多種族主義の今後	493	
垣根の維持	503	
第13章	大量虐殺事件とその規模	4
華人社会による事後調査	513 510	
第14章	人骨発見、血債問題の発生	517
第15章	対日要求、血債問題	519
第16章	マレーシア加盟と対決政策の影響	522
第17章	民間要求と政府間交渉の落差	524
第18章	中継貿易の再興	473
第19章	民営化	476
第20章	一九九〇年代の展望	2

第7章 血債妥結で対日関係拡大へ（一九六七年九月）

527

資料	
注	
略年表	570
索引	531
あとがき	594
	573
	595

(本文中の表の出所)

経済統計—*Yearbook of Statistics*

その他—現地紙等より作成。